横に拂ふ刀にあばらを切れ、二の大刀面にあたりひるむ處を、りやふみ込て、乳の下まで切さげ、おしふせて靜に首を切、二十餘年の間志したる仇、只今討て父母に手向候と、撿使にいひたりしを感せざる者なし。○略下

〔常山紀談二十五〕青山因幡守宗俊の士に、石井宇右衞門政春といふ者あり、因幡守大坂御城代の時、宇右衞門も從へり、赤堀遊閑といふ醫ありて、其從子源五右衞門を養子にしたるが、石井にゆかり有て賴みたりしかば、心得たりとて、天滿のかたはらなる寺に置て、常に宇右衞門がもとに來り、親しく玄たりしに、年經て赤堀鎗を弟子に敎へて、かなたこなたせしに、源五右衞門が鎗いまだ精練ならず、人に敎へん事覺束なしと、石井いひけるを、赤堀用ひざるのみならず、石井に立あはれよといふ、石井汝がためにこそいへ、老たる身の立あはんも無益よといへども、赤堀怒りて止らざれば、いざとて立合けるに、手もなく石井勝たりしかば、赤堀口をしき事に思ひ、延寶元年十一月十八日の夜、宇右衞門井○石が出たる隙に忍びて來りかくれ居て、かけたる鎗を盜み出し、宇右衞門が歸るを待て、戸の内に入んとせしを突通す、刀を抽てゝをたぐりけれども、十文字の横手にかゝり、深手にて倒れ死す、從者何者ぞといふを、一太刀斬て源五右衞門は逃去けり、石井が嫡子三之丞は番にて有合ず、次男彦七郎は臥居たるが出んとすれども、部屋の戸を源五右衞門かけ置たれば、踏破て出けれども、源五右衞門行方玄らずなりぬ、三之丞暇を申て、彦七と共に青山の家を出、源五右衞門が行方を尋れども、更に何方にありとも聞えざりしかば、源五右衞門が父遊閑も同意にてやあらん、此者を討ば、源五右衞門隱れ居じとて、同年の冬、江州大津にて遊閑を切殺し、それより京五條の橋、伏見の京橋、大津の町に札を建、重恩の人を殺し逃走りたるは、士の法に非る故、大津にて父遊閑を殺せり、汝が爲にも仇なれば逃めぐらん事を止よ、首を刎べし、赤堀源五右衞門へとて、石井兄弟が姓名を玄るしけり、されども源五右衞門出あはねば、所